



図12 改修された小水路 (1999. 4. 11). 河川改修に当たっては生き物に配慮するよう建設省が通達を出して10年近くが経つが、相変わらずこのような工事が行われている。見た目を良くしただけの完全な3面コンクリート護岸である。



図13 改修後の調整池 (1999. 4. 11). 図9と同じ場所。県の工事責任者と協議し、水が枯れて池が乾燥することがないように、水門を調整してもらっている。写真左側から水が流れ込む。

クトをもって受け入れられた。一般の方にも「レッドデータブック」「絶滅危惧種」という言葉がかなり浸透したようである。それ以上に驚いたことは、行政の対応が非常に素早かったことである。いずれも公共事業が関係していたわけであるが、該当の部署（これは当然）と環境保全課が素早い対応を示した。県環境保全課の業務は、これまで公害対策に重点が置かれ、自然環境や生物の保全

については、おまけ程度にしか扱われていなかった。調査・研究は人任せで、自らの手で勉強しデータを収集することはほとんどなかったが、今回のことで意識は大きく変わったようである。生き物の情報を積極的に収集し、その保全の在り方が検討されている。10年前なら無視されるような事例かと思われるが、声を出せば聞いてもらえる時代になったと実感している。

○鷺谷いづみ・飯島 博編『よみがえれアサザ咲く水辺～霞ヶ浦からの挑戦』（文一総合出版、1999年5月、A5版229p、1900円+税）

霞ヶ浦で進められる「アサザ・プロジェクト」の考え方と実践を学ぶための応用生態工学研究会現地セミナーが昨年開催された。本書はその記録であるが、一地域の試みを超えて、環境の保全と復元とは何かを深く問いかける内容となっている。

プロローグは編者のひとり鷺谷さんが「ほんとのビオトープ」＝潮来町「水郷トンボ公園」と出会う話から始まる。形だけのうさん臭いビオトープが日本中にあふれる中で、なぜこの取り組みこそ「ほんとのビオトープ」と言わしめたのか。そ

れは、もうひとりの編者である飯島さんの「湖と森と人を結ぶ霞ヶ浦アサザプロジェクト」（4章）を読めばよくわかるだろう。

それに先立ち「日本の水草の現状と保全をめぐる課題」（角野）、「アサザと霞ヶ浦の植生帯の保全生態学」（鷺谷）、そして建設省工事事務所長による「霞ヶ浦の環境対策の現状」の3つの報告がある。最後は現地でプロジェクトにたずさわる人たちの生の声を伝えるトークショーの記録。

限られた紙幅では紹介しきれないほど多彩な内容が盛り込まれた本で、水辺の保全と復元を語ろうとする人にはぜひ読んでほしい好著である。

（角野 康郎）